

1888～89（明治21～22）年の尾崎行雄の欧米報告記（1）

— アメリカを中心として —

時任 英人

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

（2017年10月1日 受理）

はじめに

尾崎行雄（号・学堂→愕堂→罌堂）〔註1〕と犬養毅（号・木堂）の2人は、その政治的生涯を通じて日本に立憲主義を実現させようと努力し、そのことによって後発国としての日本の政治システムを西洋並にしようと考えていた政治家である。

その2人がどこで知り合ったかについては、今一つはっきりしない。分かっているのは、2人とも慶応義塾で学んだということである。慶応義塾で犬養の後輩である尾崎行雄は、義塾時代に面識があったのではなく、そこを退学してからだと証言している〔註2〕が、2人とも義塾を退学し、それぞれに自分の道を歩き出してから、演説会などで知り合ったようである。

そうした面識を経て、1882（明治15）年に立憲改進黨の結成に参加すると、それまで以上に親しくなり、ついには尾崎が犬養の「弟分」のような存在となり、党の遊説隊として一緒に地方を演説してまわったこともあるようである。

その頃から尾崎は発言と行動が犬養に比べると過激で目立っていた。尾崎は国会開設直前の政界を揺るがした大同団結運動にも参加し、東京を火の海にするというような過激な発言をしたことから、尾崎は処罰せられ、東京から3里追放されることになった。いわゆる保安条例に基づく処置であった。この時までには「学堂」と称していた雅号を、保安条例が自身に適用され「吃驚」したことを表すため、「おどろき」を意味する「愕」を入れて「愕堂」に変えた。それで尾崎は西洋に行くことを決意し〔註3〕、資金は犬養から譲り受けたが、これは犬養が西洋に留学する資金として三菱の朝吹英二から提供されたものであった。その金額がどれほどであったかは判明しないが、新聞紙に包まれていたという。この点について、犬養は次のように述べている〔註4〕。

明治二十年の秋であつたか、朝野新聞を始末して借金も済まし、朝吹〔英二〕が洋行費を作つてくれたから其積りで骨休めに、伊香保温泉に出掛けた。その暮に有名な保安条例で、尾崎は退去を命ぜられた。其処で洋行しようとなつたので、朝吹は、尾崎の方が急ぐから、貴様は後になつてくれと云はれ、俺の洋行費をすつかり、尾崎に横取りされて了つた。

また、この資金については伊藤痴遊〔仁太郎〕によると、横浜の両替商である西村喜三郎も2,000円提供したというが、のちに尾崎が東京市長になると西村の相続人から返金の訴訟を起こされたということである〔註5〕。したがって尾崎は、当時においても相当の資金を手に入れていたのであろう。

さて、このとき尾崎は、次のような書簡を犬養に書いており、湘南の温泉にいたようであり、身辺を巡査が監視していることも報告している〔註6〕。

拜啓 今朝一書差出候後古鉄君〔朝吹のこと〕より来書有之、至急横浜若くは神奈川の居所を定めたる上、洋行之公告を出せとの事なれど用務上之手紙其他之往復は総て駿台之留守宅にて取扱ふ事に致置候間強て居所を定むるに及ばざるやに勘考致候加之温泉場より外行を公告するも雅致ある事ゆゑ当所よりた直に差出候間左様御承知且古鉄君に御通知被下度候何れ両三日中には横浜の西村新七方まで立戻り可中候得共公告は其以前に出度候

先日来巡査三人づ、付属し居り外出の節は二名随行する事多し且つ東京の如く数々交替せず五六日間同じ人材切りに致居為万事都合宜布御座候来客も大抵帰京し本日などは広福住楼も客は小生一人に御座候湯本には于今浴客随分有り

別紙公告文乍憚中村弼氏〔のちに尾崎の秘書官となる人物〕に御渡し被下度懇請す
七日

行 雄

木堂大人

この資金を尾崎に譲った犬養はこれ以降もやはり洋行することを考えていたようであるが、そのことを示す岡山の実家の兄に宛てた書簡がある〔註7〕。

小生兼て企居候外国行ハ近来病氣ノ為め延引いたし候得共今五六ヶ月も養生いたし十分健全ニ復し候ハ本年末にも出発イタス筈ニ御座候

洋行ハ先ツ三ヶ年間ノ積リニ候故帰国ノ上如何いたし候哉未タ予定ハ出来ザレトモ多分ハ備中より撰挙サレテ国会議員トナル内意ニ付事ニよりテハ予め其辺ノ計画もいたし置度若し故郷にて撰挙^マ無覚東候ハハ小生知人ノ多キ他府県ニ於て候補者ト可成何レにても今日より略考置キ候はずてハ不相成り候間此辺ハ兼て御心掛置被下度候

犬養にしてみると、尾崎ほどではないとしても上京以来、洋書を読み、その内容を使って政治評論を執筆し、保護貿易主義に関する田口卯吉との論争ではアメリカの書籍を使った〔註8〕ものの、日本の目指す政治システムの理想はイギリス型の立憲主義を社会的に

宣揚していたので、イギリスに対する憧れがそれなりあったものと思われる。しかしながら、尾崎に比べるとイギリスに対する憧れの念はなかったようであるが、やはり一度はイギリスに行くことと決意して、資金まで調達していたのであるから、やはりこの考えは捨て難かったものと思われる。この時実兄に資金を尾崎に譲ったとは言えなかったため、病気を理由にしていたようであるが、その病気が快復すれば年末にでも行くことになるので、3年ほどで帰国し衆議院議員になるということを考えていたということが、この書簡から明らかとなるのである。なお翌年もまだ洋行することを考えており、同年の秋にも出発しようとしていたようである。

なお犬養は、もしこのとき洋行していても英米最良になることはなかったものと思われる。というのは、既にこれ以前から犬養は、中国の教養を学んだことでアジアに対する関心が旺盛であったと思われるからである。それに、もう少し欧米に関心があれば、その後渡航してもいいはずであるが、それが一切ないということは尾崎のような関心は生涯を通じてもたなかったということであろう。

これに対して尾崎は、このときの洋行を契機として生涯に亘って英米最良の行動と発言を取ったという意味で、その後の2人の政治姿勢の異同の一端を決定づけたと言える。尾崎は英米を自らの生活のモデルとまでしていたような印象を与えるが、これはのちに最初の夫人が亡くなってから後妻にした女性が日本人男性とイギリス人女性の間に生まれたテオドラ夫人であったことを見ても明らかである〔註9〕。

さて、いよいよ洋行する時が来た。1888年1月26日に大隈重信が横浜で送別会を開いてくれた。出席者達は、大隈夫妻、矢野文雄、藤田茂吉、牟田口元学、朝吹英二、それに洋行費を譲った犬養らであった。そこで、大隈は尾崎を別室に呼び入れて「近いうちに内閣が変わつて、黒田が総理になり、自分も入閣するはずである。まだ暫くは秘密だが、君は洋行するから知らせておく」〔註10〕と言ったという。

その翌日、今度は、やはり保安条例で退去を命じられた、自由党の星亨たちから伊藤痴遊を通じて、尾崎のために送別会を開きたいということを書いてきたので、これを了承し出席した。それまでは自由党は「主義においては敵であつたが、私交関係は別」だと考えていたため、「御好意まことに有難い、どこへでも行かう」〔註11〕と述べて、招きに応じ、そこで尾崎は、初めて星に面識を得たのであった。

同日、アメリカに同行する、日本人の中で唯一英語を「操る」尾崎の弟の行隆〔註12〕が上海から帰国した。29日出航予定のサンフランシスコ行きの北京号は、出発が2日遅れた。すると、後藤象二郎が送別に来てくれたため、尾崎は「深くその厚意に感謝せねばならなかつた」〔註13〕。また30日には、矢野、末広、朝吹、藤田、犬養らも来てくれ、彼らの多くは1泊までしてくれた。そして31日に、友人達に見送られて北京号に乗船した。尾崎は今回の旅行中書物などは読まずに、できるだけ見聞を広げようとして旅立ったのである。

そこで、本論では、洋書の翻訳や読書によって理解していた欧米が実際は、尾崎の眼にはどのように映ったかを明らかにすることを目的とする。この時の欧米旅行について、尾崎の弟子の伊佐秀雄が定評ある伝記を纏めているが、その中で今回取り上げる報告記事を評価して、これは「単なる見聞記ではなく、・・・独自の世界観、人生観であり、犀利な文明批評、透徹した社会哲学を含み、当時その読者を傾倒せしめたのは勿論、今日これを再読しても興味深く、その観察と推測の適確周到なるに驚かざるを得ないものがある」[註14]と指摘しているが、筆者は果たしてそれほどの内容かどうか疑問に思っている。そのことの一部をこの原稿で提示したい。さもないと、ここで描かれた欧米に関する見聞録に見え隠れする総ての見解が評価されることになるからである。

1. アメリカ上陸

1888年1月31日に横浜を出航した北京号は、小船であったため揺れが激しかった[註15]。船旅自体は退屈であった。慶応義塾に入学して以来、イギリスの政治文化に強い憧憬の念をもってきた尾崎にしてみると、たとえ保安条例によって政治犯になったことがきっかけとはいえ、そうした憧れのイギリスに向けて中継地のアメリカを目指して出発したのであるから、相当の思いがあったはずである。

尾崎を含めて上等船客は16、7名だったが、実質的な上等船客は、7、8名に過ぎず、残りは従者券で乗船していた。横浜出航後1週間ほどは波が高かったため、最初の数日間は不愉快であった。したがって、読書もしなかったが、1週間を過ぎる頃になると、波が静かになり、とくに到着の数日前になると、「水天一碧、海面鏡」のようになり、さすがに太平洋という名前に背かない光景であった。

天候も渡航前には、アメリカに向かう汽船は、北方の航路をとるということで、寒気が強いのではないかと想像していたが、最初の1週間ぐらいは横浜と同様で若干暖かった。それから次第に寒くなり、途中はほとんど「早桜時節」の気候と同じだった。出発から19日を経て、ようやくサンフランシスコ港に到着した。そこで船上から初めて見るアメリカの風景を、次のように記した[註16]。

船上より見渡したる丈にても、当港は実に天成の良港にて四面の丘岡には青草充滿し、日本にて枯寒の野色のみを見慣れたる目には特に一段の愉快を覚えたり。陸上には汽車白煙を放て縦横四方に往来す、之を船人に叩けば石炭を焼かず蒸気を用ふる故に其煙白し云へり、豈に石油を以て蒸気を作るの謂ひ乎。水上は諸形の汽船往来し、又我が都鳥と全く其形を同うするの水鳥甚だ多く、人をして坐ろに懐郷の念を動かさしむ。(中略) 当地の気候は日中は我が桜花時節に同じけれど、朝暮は頗る寒冷なり。其変化の太だしき毫も油断する能はず、少しく油断すれば必ず病を得べし。且つ空気寒温の工合大に日本に異なる者と見え、左まで凛烈とも覚えざる

微風も何となく人をして膚粟を生ぜしむるを覚ふ。

直ちに上陸しようとしたが、下等船客でチフスを発症した者が1名いたため、船が検疫に引っかかり、2週間の停船を命じられ上陸できなくなった。しかも、その1週間後にはまたも中国人の乗客に1名の患者が出た。そこで、上等船客の1人が下等船客と上等船客とを分離してほしいということのを会社側と交渉すると、それが認められた。その結果、3階つきの小蒸気船に上等船客たちは移されることになった。

ところが、サンフランシスコ港で上陸を楽しみに待っていた停泊中の船が、ある朝今度は激しい暴風雨に襲われることになった。尾崎が目覚めてみると、船が危ないということで救命艇が出されたほどであり、暴風雨は益々激しさを増していった。かくするうちに錨の鎖が切断されて船は陸に向かって吹き付けられた。乗客たちはパニックとなり、女性や子供達は泣き叫んだ。以前からこのような事態に直面すると腹が据わる尾崎は、船の2階に上がって様子を見ていたが、一大音響をあげて船が波止場に衝突した瞬間、波止場に飛び降りた〔註17〕。まるでその後の尾崎の政治的生涯を象徴しているような手荒いアメリカへの上陸である。犬養と同様に気性の激しさもあるが、それ以上に主張が違うグループとは付き合えない尾崎の性格のため所属政党を転々とし、主なものだけでも立憲改進黨→憲政党→立憲政友会→同志研究会→立憲政友会→政友倶楽部（亦政会、中正会）→憲政会→革新倶楽部→新正倶楽部という具合に政党を渡り歩き、無所属の期間もあったほどである〔註18〕。

しかしこれは一面では、アメリカが尾崎の入国を荒々しく歓迎しているようにも考えられないだろうか。伝統性から抜けようとしただけでなく、支配を目論む西洋帝国主義に立ち向かおうとしない中国と朝鮮の後発性〔註19〕と、その両国に文化の多くを負ってきた日本の後発性とに対してある意味ではうんざりしてしまっていた尾崎は、日本が近代化していく上で学ぶべきモデルの一つと考える、尊敬すべき国の一つであるアメリカへ上陸しようとしていたからである。

この船中で隔離されている時、尾崎は大隈重信に日本を出発して以降のことを、次のように報告している〔註20〕。

・・・少生儀去る三十一日午前十時半横浜解纜本月十七日朝四時頃無事に着港仕候得共、支那船客中に痘瘡患者有之候為め二週間の消毒法を受る筈にて未だ上陸を許されず、船中無聊に苦み唯た読書を事と致居候。尤も上等船客丈けは不日上陸を許さるへきやの説あり、領を延て吉報の至るを相待申居候。横浜出發後は随分波高く日々甲板にも少しづゝは打拳る位なりしか、不愉快に感したるは最初の三四日にて以後は気分平常に復し申候。但し不愉快に感したる最初之三四日と雖も少しも読書をば廢せさりし事に御座候。右之次第ゆへ身体は却て健康に赴き、面貌も自ら多少

肥満したるを覚ゆ。(後略)

大隈は、尾崎に政界デビューのきっかけを与え、これまで常に行動を共にしてきた頭首であり、横浜にも夫妻で見送りに来てくれるほど信頼されていたため、このような報告をしたのであろう。

船からアメリカに飛び降りたものの、巻き煙草を口に咥えているだけで、荷物を何も持っていなかった。大揺れの船から身一つで飛び降りたのだから当然だが、心だけは喜びにあふれていた。暴風雨のなか箱馬車に乗って、パレス・ホテルに行った。これで検疫を受けずに済んだ。数日ののち、荷物の詰まったカバンが届けられたが、それまでその時の天候の具合と船着き場の荒れ模様のため塩水に漬けられていたようなものであったため役に立たない物が多かった。

サンフランシスコで尾崎が印象に残ったのは、次のことであった。第一に新聞がよく読まれていたことであり、中身は日本の新聞と比較すると程度は低いと思われたが、上下貴賤関係なく皆が読んでいることに驚きを覚えたほどである。また、新聞記者たちが珍しい人をつけ回し、尾崎が上陸するやいなや記者達が続々訪れて来た。その記者達の資質は、一通りの教育を受けて多少の学識ある者達が多いが、「一を聞て十を悟る」のではなく、「一を聞て十を書するの弊」があるため、「動もすれば大誤謬を流伝すること」が多い〔註 21〕、と尾崎は考えた。

第二に「婦人の権力が、聞きしにまさつても強いこと」と、何事につけても「報酬が高」いために人を使用するのが簡単ではないことである。この点は、「迷惑のたね」となってしまったほどである〔註 22〕。

第三は、西海岸に在住する日本人についてである。このことが最も尾崎を深刻にさせたため、日本に報告する最初の一連の記事の中では多くのスペースを占めた。まずサンフランシスコに在留している日本人学生が、本国の学生よりも学業が「劣等にして英学の初歩すら修めざる者」が多かったことである。尾崎の考えによると、日本に満足できないことを動機として「百難を排し万里の怒濤を超えて遙々」アメリカに来たほどであるから英語なども一通り学んでおり、そのことは日本にいる学生と比べると「多少優過せる人物」であるのではないかと考えていたため、落胆させられたようである。

それに 2,000 人ほどの在留邦人のなかで大学に進学するような者は数名しかおらず、小学校に通う者は 300 人もいなかった。ほかの者たちは、体格が「微弱」であるうえに、台所の仕事にしかつげず、また下女仕事をしているだけであるため、1ヶ月 14、5 ドルから 2、30 ドルの給金しかもらっていない。これでも日本人の貧乏書生に比べると「遙か幸福」であるが、このことによって日本の品位を落とすことが極めて大である。したがってサンフランシスコでは日本人であれば上下貴賤なく、多少軽蔑され、上等の料理屋などではあまり良い顔をされないほどである。それゆえ、当地の日本人達は、民権論で日本政府を

攻撃する以前に、まず出稼ぎ兼修学人（留学生か）の地位を高めて、「支那人と同視せらるゝが如き軽蔑を禦がねばならぬ筈」だとまで考えた〔註23〕。このような分析には、尾崎の中国人に対する蔑視観を窺うことができる。

実際、貧しい日本人がアメリカに入国する数が増加するため、現地の人たちの感情が「日々險悪」となり、アメリカ人から見ると、日本人と中国人との間にあった距離が「減少」しており、一日も早く対策を立てないと、遠くない将来に「支那と同じく拒絶条約締結の侮辱」をうけて、日本の品位を落とすことになることを心配した。それに新聞の記事にも日本人に対して「無礼の言語」を使う回数が次第に増加し、「支那人を賤蔑嫌悪するの感情は漸く拡張して黄色人種全体に及ぼんとする」までになっている事態を危惧したのである〔註24〕。

また尾崎が「公平」に「観察」してみても、「日本人の方が少しく心術の奇麗なる位にて其他別に大に異なりたる所」がないだけでなく、「執る所の事業より云へば支那人は許多の資本を卸して盛大なる商売製造等を営み居れど日本人は皆な料理番及び廊下、雪隠、玻璃窓等の掃除人たるに過ぎず、支那人に比して寧ろ下るも上ることなし」、それゆえアメリカ人が「漸次之を同一視せんとするの形勢あるは無理からぬ事」であるとまで考えた〔註25〕。さすがに日本国内でジャーナリストとして著名になりつつあった尾崎は、中国人が日本人より優れた商売での成果を出しているということに気付いていた。ある意味でこのような考えは、日本人が外国では中国人より劣っており、そのことで日本人が差別を受けていることを指摘していることになる。

では、どのような対策をとれば良いと考えるのか。中国人と日本人とは違うということを確認に理解させるための方策である。まず日本の識者と日本政府が、アメリカに在留する日本人に「注目すること一層深切ならんこと」を求める〔註26〕。このことを、次のように説明する。

近年は、日本人も「生意気」になってきて、アメリカは「新開」の国で「制度文物一つも見るに足る者」がないと言って「一概に之を擯斥」して、外交・貿易上においてこのことを殆ど度外視する傾向があるが、これは「非常の誤解」であり「実に日本の大事を誤るべき僻見」である。この原因の一つはアメリカ製の麦酒（ビール）にあるが、国家の「盛衰隆替は麦酒の善悪挙手の津野」によって支配されるものではなく、「米国の富源は無尽蔵なり、米国こそ日本の最大顧主なり花客」であるにもかかわらず、日本政府と人民は、このことを「度外視するの情形あるは商売気」のない国民と言え。ところが、今後益々増加しつつある出稼・留学生は、そうした日米間の貿易を「増減」するほどの影響があり、これはたとえば「支那人を拒絶するの余勢は延て支那品を拒絶するに至る」と同様、日本人が「貴賤の労役に服」することをやめないと、日本の物品もアメリカ人に擯斥されるようになるのは必定である。彼ら在留邦人たちは、日本人から見ると「取るに足らざる出稼人」であるが、アメリカ人から見ると「日本人の代表者」であり「日本の有志者

なり愛国者」であるため、彼らに「注目する」必要があるのである〔註27〕。したがって対策として、①旅行券の「下渡手続を嚴重にする」こと、②太平洋汽船会社と特約を結ぶこと（なお、この具体的内容については触れていない）、③海外出稼ぎを禁止する法令を頒布すること、④波止場に警察官を置いて外国船が出帆するたびに嚴重に取締ることを挙げたが、そのいずれにせよ、「最も効力あるべしと認むる所の者を施して充分に出稼兼修学人の渡航を禁遏」〔註28〕することを求めたものである。

しかしながら、尾崎は、彼らを今後の日本社会に貢献する人材に育てる方向で考えることも指摘した。つまり、彼ら在留邦人を、政府が「統轄奨励」すれば「非常の利益」を日本に及ぼすことになり、下女仕事をしている者達でさえも、日本の「学芸教育若くは生産事業の先導者」となることができると指摘したのである。彼らが現在輕蔑を受けているのは、日本政府が「度外視して一顧の労だも取らざる」ことこそが、「実に其の一大原因」となっているからである。サンフランシスコは「新開不文の地」とは言いつつも、日本に比較すると、社会万般のことが総て日本より「数等上」にあつて「我が国人の手本と為るべき者」が多く、とくに活發な商業の中心である製造工業が「盛大」で「人民の勤勉にして寸陰を愛惜する如きは、我が因循姑息にして且つ懶惰なる人民に取つては適症の良薬」であるため、日本も「早晚此等の風習を誘入せざれば到底富強隆盛の途に上る能はざる」とまで述べた〔註29〕。そうした任務を在留邦人にさせるのである。そして、次のように説明する〔註30〕。

白哲人種には輕蔑せられ本国人には擯斥せられ既に師兄の教訓に遠ざかり、亦朋友の奨励をも受けず天地の間に孤立して情意の向ふ所に恣にするの貧書生すら尚此の如し、若し本国の官吏少しく之に注意して教導奨励の方法を施さば其進歩實に驚くべく、此輩の手を借りて我が学芸、道德、商売、工業其他万般の事態を改良し、我が国の面目を一新するに至ることを得べし。

つづけて、明治以後から7、8年頃までに日本から海外に留学して帰国した者達に比べると、現在のアメリカ在留邦人達は「無心なる者」が多いとは言え、彼らの方が「優」つているとまで指摘した。そして、そうした在留邦人を「誘導奨励して其状態を改良するの手段」として、①衣食のための經濟に窮さない知識や道德を兼備している人物を派遣して彼等を「統轄」させること、②日本人に適する夜学校及び寄宿舎を開設して彼等を教導すること、③四方にある結社の規律を一層嚴重にした上で、これに加盟して知識や道德を「研磨」しない者は入会させないほどにして、その信用力を増加させ、それで他の者達を「漸次感化」させることを挙げたが、いずれにせよ「速攻」があるのは日本政府の力で「誘導感化」することが良いということになる。そのためにも、まずサンフランシスコの日本領事館と出稼ぎ修学人との関係が「隔絶」しているのを、これを「親密」にすること

も必要であり、領事に在留者達の「善を励まし悪を懲ら」しめる任務に当らせるべきであるとした〔註31〕。

ここまでして、尾崎はアメリカでの日本人の生活ぶりを改善させようとしたが、これはイギリスに行く途中での体験として片付けるにはあまりに大きなことであつたものと思われる。したがって、こうした勧告をしたのであろうが、ここでそうしたある意味では期待されていない日本人達を新たな日本の文化の担い手に仕立て直そうとするアイデアはなかなかのものである。しかしながらその動機には、朝鮮人や中国人と同一視されることを恐れたこともあつた。朝鮮の壬午・甲申両事変に際して、あれほど尾崎自身が批判した朝鮮や中国人と同じ様に見られることを嫌つたのである。

さて、本来はもっと早くニューヨークに出発する予定であつたが、先述した船舶事故により、所持品の弁償のための手続きに時間がかつたためサンフランシスコでの滞在が長引いた。結局滞在中には賠償交渉が進まなかつたので、その件を友人に託し、ニューヨークに向けて出発した。

2. ワシントンに至るまでの印象

ニューヨークまでの道中、尾崎はいろいろ見聞し、さまざまな感想をもつた。4月5日午後5時に尾崎は、同行者5人とともにサンフランシスコの隣の市であるオークランドを鉄道で出発した。弟の行隆も一緒である。途中、カリフォルニア州東部を縦に位置するシエラネバタ山脈を夜中に通過し、車中で2日過ごすユタ州のソルトレイクシティに到着した。ここにはモルモン教の寺院があり、大きな湖のある所である。丁度この時、モルモン教の寺院で宗派の大きな会合があり、著名な宣教師の説教が聞けるということで信者達が7、8千人も集まつており、大きな寺院ではあるものの立錫の余地もなかつた〔註32〕。

今度はロッキー山脈を見たくて電車に乗車し、海拔「一万有余尺」もある高い所を上下した「奇観壮景」は、簡単に「拙筆の書き得る所」ではないほどであつたため相当感心したようである。

溪流に沿って山腹を上下すること十数時間が経つ頃に人の声がするので出てみると、遙かに望めば煉瓦色の岩石が剥きだしとなつており、道を圧倒するような左右に直立した「宛然城門」の形をした景観が見えてきた。それを過ぎて更に進んで「奇観壮景」の所に出ると、その最も「奇勝なる所に至る」たびに「眺覧に便利なる」屋根なし車を付けて乗客たちを楽しませるようにできていた。尾崎にしてみると、金以外に世間を楽しむ物があることを知らないと考えていたアメリカ人がロッキー山中の景色には感心していると見え、寒さを忍んで先を争つて「眺覧車」に移つたことを書いている。

そののち、ロッキー山を下つて車中に一泊して到着したシカゴを、一日中滞在して見物しようと思つて下車したが、当地は製造場が盛んなため黒煙が空を蔽い、市中は人馬の往來が目につくばかりであつたので尾崎には不愉快であつた。それゆえ、半日滞在して次に

行こうと考え、馬車を雇って公園や配水場、それに市中の主な所を見学した。尾崎が配水場と名付けた、水を清めるための「機械場」はアメリカの中でも、一、二を争う「大仕掛」と聞いていたが、なるほどそうでもあらうと感心した〔註33〕。

つづいて、日本にいる時に飽きるほど聞いた評判のナイアガラの「大滝」を、是非とも見物しようと決心して近くのホテルに到着するなり急いで食事をすませ、馬車を雇って見物に行くが、その途中は寒村であろうと想像していたのに反して、人口が4,000人という。「風光佳絶」の評判の大瀑布の上流にある島を見ようとしたが、積雪が道を塞いでいた。景色は極めて「閑寂」であるが、瀑布の音響は天地を震撼するように鳴りわたり、家屋と同じような大きさの大雪の塊が上流から流れてきたのが岩に衝突し「破壊散乱」する様子は、ただ耳目を驚かさばかりである〔註34〕。ナイアガラには二つの大瀑布があり、一つがアメリカ側に位置しているのに対して、もう一つはイギリス領カナダ（1931年にイギリスから独立）に属していると指摘した。

尾崎は、よほどナイアガラの滝が気に入ったと見え、一週間ほど滞在したいと考えたようだが、同行者の都合があるので「壮絶清絶且つ麗絶の地」を去ってニューヨークに向かい、14日に到着。一日も早くイギリスに行きたかったのであるが、アメリカでしか得られない「便利」があるので、欧州情勢が「劇変」しない間、しばらく滞在することにした。アメリカ議会の傍聴しいろいろな官省の事務施行法を見物しようとして、半日ほどかけて汽車でワシントンに向かい19日に到着した。

3. ワシントンにて

ここから本格的なアメリカの政治社会に関する報告を始めた。まず尾崎は、日本を発つ以前から日本の進歩は「極めて遅鈍」であるため官民ともに現状に満足せず、その「速力を倍蓰して進歩するの計を力」めないと、とてもではないが欧米諸国と「対立」し得ないというのが持論であったが、アメリカで現実を見てみると益々このことが誤っていないということを実感した。そしてアメリカについて、百年後は分からないが今日の現状から見ると租税は軽いし、立身出世は「力次第勉強次第」（これはアメリカの社会現象の一つである「サクセスストーリー」の原因の一つである）であり、生計を立てるのも容易であるうえに、外国人には「敬重」され既往が「立派」である。それに今後は「多望」で「幸福は多」いし、という具合にいいことばかりで、アメリカの将来は「無事泰平にして無限の副緑寿」をもっていると言っても可能であるが、これは政体が「自由」にして「人民の進歩を妨げざるが如き土地の豊饒にして諸般の耕作に適する」ように、また最初の移住者が「堅忍不拔勤儉力行の手本を示して後世子孫の龜鑑と為」ったように、原因は一つだけでなく、また次のようなことも関係しているとも言う。つまり、「天下万国の人種」が一つの場所に集まって「互に競争する事」がそうである。同じ人種が一ヶ所に集まっている時は、思想が「停滞」して「活動の区域も次第に狭少」となるため、「進歩発達」を止めな

いとしても、極めて「遅鈍」にするのは古今の歴史上の例が多くある〔註35〕。

これに反してアメリカは、建国当初から「各々異種類の知識、学芸、風俗、習慣及び思想を逞うし、彼此互に切磋し、長短相ひ取捨するが故何事も変化上進して毫も停滞不動の陋域に沈淪するの患」がない。このことを評してアメリカこそ「真に天下万邦の美所長所を集めて之を己に適要する者」というとして、最大限に評価する。とはいえ、建国して日が浅く人々が「射利の計に急」なため、欧州で行われているように「閑雅悠長の風致に乏し」いうえに「万般の事物皆未だ野卑粗大の譏を」免れるものではないが、これはアメリカ人の「罪」ではなく「新国の罪」である〔註36〕とし、そのことを次のように説明する〔註37〕。

・・・他の旧国にては万事に付け古来の習慣ありて新奇不慣れの事物は有形無形の別なく、総て容易に入り難きを常とすれど、米国に至ては則ち然らず僅か百年以前に開けたる国柄にて固有の事物とては一も有らざる故、天下万国の美所長所は悉く採て以て我が有と為すに何の障礙もあることなし。斯くて天下万国の人類を集め天下万国の智力を集めて互に切磋琢磨することなれば、其諸般の發明改良に富み日月就の勢を逞うするは当然の事と思はる。

こうした「天下万国の智力と人物」とが一ヶ所に集まって競争する以上は、他のものよりも少しでも「知識の多く見聞の広き者」が競争に勝利することが当然となる。それゆえ尾崎の見たところアメリカ人は、知識や見聞を広めることに熱心なことには実に驚くべきであり、書籍、新聞、雑誌などの出版物が多いことを見ても、その一端を推測できるという。

つづいて「日米間の関係」では、自らが数年間主張してきた欧州の国際関係に対する考えを五点に亘って整理したなかの一つで、欧州列国は無用の軍備に「巨大の財貨を費消し、且つ其発達漸く終局に近づかんとするを以て富資の増加米国の如く迅速なる能はず」と指摘し、かつて犬養も指摘したようにこのことからアメリカをその「位地形勢」から見ると軍備に「巨大の財貨」投じる必要がないとともに、富の発達が極めて「迅速」であるため、日本の「最大輸出市場」となっており、今後もこの傾向は増加していくであろうから、日本にとっては「実に無尽蔵を有せる好花生」と言うべきであると指摘した〔註38〕。また、このことに加えて、尾崎は、日本がアメリカと友好関係を継続していく場合に如何に好条件を備えているかを次のよう整理した。

まず第一にアメリカが鎖国から開国させた日本を「提撕誘導」する「責任」を負っているような感情をもつとともに、道理の上からも日本にとって好ましくない方向で「開国通交」させたのであるから「提撕扶持する徳義上の責任」を負っていること、第二に地理的にアメリカは欧州列国と違って日本に最も近いこと、第三に「小弱国」が大国間に「介

立」することができるのは、万国公法が基づく「正理公道」の原則であるが、欧州の強国は常に「体裁よく万国公法を破犯して其私利私欲を逞うするの計を講究し」ているのに対してアメリカは、「強大」であるにも拘はらず「建国の本原素と正理公道の四字に在て歴世の教養する所亦此四字に外ならざる」がために、他の強国と違って万国公法を「破壊せんとは力めずして却て百方維持の計を施」しているのです、この点においてアメリカは他の「小弱国と全く其利害を同うし之が味方と為て協心戮力する者」であること [註 39]。このような考えは、結局「日米親交の利益を證明」するものであるとまで記した。これは、あまりにアメリカに好意的な内容であるが、その後カリブ海諸国に対して砲艦外交をとり始めるとその評価を修正するのが大変だったのではなからうか。

いずれにせよ当時、期待を込めて書いた楽観的な日米友好論であった。当時のアメリカに対する思い入れが如何ほどであるか、想像に難くない。かくまでして尾崎はアメリカと「親密の関係を結び」、これによって「政略上に貿易上に我が利益面目を増進」させるべきだと主張したのである [註 40]。

この当時に至る日本の貿易に占めるアメリカの比率は実際高くなっていたが、その対米輸出の中心は茶と製糸であり、その数字は 1884 (明治 17) 年の対米輸出高の 90 パーセントにも及んでいたほどである [註 41]。

4. アメリカ行政府の印象

尾崎がワシントンで最も印象深かったのは、アメリカの行政機構の簡素化ということであった。1880 年当時のワシントンの人口は 14 万 7 千人であった点を取り上げ、これはワシントンが「中央諸官衙」を目的として建設された都会であるため、他の「商業製造」を目的とする都会のような「増殖」はないと指摘し、この一つを取り上げてもアメリカの政治が「簡易にして政府は無用の干渉を施さず、租税の軽くして人民の苦痛を惹起さざるを」証明するものであると記した。これに比較すると、日本の場合は人民が「貧困にして租税重きが故政府の在る所は富資の偏集する所と為る」が、これは「政府の事業繁多にして民間の事業少なきが故諸官衙の在る所は事業と人物との焦点と為る」ためであり、したがって日本政府を木曾の山中に移すと、木曾の山中はたちまち「繁華富裕の都会と為て東京必ず枯寂の景況を現はすべし」とまで断言した。これは、尾崎のような民権論者が日本で主張していたことを説明するのに的確な例と考えられることから、余計取り上げたかったのであろう [註 42]。

議会を目撃した記事も執筆した。そのとき、アメリカ議会が開催中で、上下両院で海関税廃減案が議題として激論が展開されていた。しかし尾崎は、このときのアメリカ議会での議員たちの態度に大いに「失望」することになった。「其形相は可なりに立派なれど、議員其人の言行は意外に乱雑」のように見え、[「反対党員の演説に際し続々議場を立去るは偶ま以て度量の狭隘にして国家の為に真誠に利害を講究するの意なきことを證す

るに足」〔註43〕と考えられたからである。このように彼らの態度が尾崎の目には、あまりにも不真面目と映った。他にもたとえば、議場内の周囲に五、六尺の衝立があってその表側に長椅子があり、そこで煙草を吸っている者がいたり、また果物を齧っている者がいたり、かと思うと後ろの席から発言する者がいるとその前の席の者が着席したままで回転椅子を廻して正面に背中を向けたままで話を聞くというような光景も目撃した〔註44〕。

日本でジャーナリストとして活動を始めて以降自由民権を主張し、イギリス政治を理想型として理想の政治家の態度や政府のあり方などについて日本人に説いてきた尾崎にしてみると、国家の重要事を議論する議会は整然としていて、出席する議員たちは、襟を正して臨むべき場であると考えていたはずであるため、議場内でのアメリカの議員の態度は評価できないものであった。しかし、これは飽く迄も議会に対する「失望」にしかすぎず、基本的にはアメリカの政治体制や制度を高く評価する姿勢は変わることはなかった。

次に、「自由の大義上下四方に行渡」って配置されていると考えられるワシントンの官庁についてだが、そこでは「簡易実用と鄭寧親切を主とし、官吏の人民に対して鄭寧親切なるは毫も商社旅館の番頭の客人に対するに異ならず、決して横柄傲慢なる言語を使用するが如きことなきなり」と感心したとしている。また、議会議事堂の建物は「実に巍々堂々」としているにも拘わらず、門番も受付もなく、人の出入りは自由で「苟も双脚あるものは其好む時に行き好む時に帰る」ことができる。それに「政事堂」（アメリカ議会議事堂のこと）を保育や子守りが子供をつれて遊ばせるにはこの上がないほど「好場所」で、実際子守りの来遊が常に後をたたないほどであり、また女性が野菜市場に行くついでに籠を下げたまま、政事堂を徘徊するのを見ると、「儀式バリたる日本人は国会の威儀を損すとでも評すべきなれど、米人は毫も此等の事に頓着せず提籃を提げたる下女若くは小児を伴へる児守子の政事堂内を徘徊するをば愧ぢずして殖産興業の他国に劣るを恥ぢ、政事堂に門番受付なきをば愧ぢずして學術技芸の他国に後るゝを恥ぢ、官吏の威張らざるをば愧ぢずして国富の進歩せざるを恥づ」〔註45〕と指摘した。

このアメリカ滞在中に尾崎は、ホワイトハウスを訪問した。この官邸は日曜日以外は、来館者を許可し、1週間に1日だけは誰でも大統領に面会して握手できるということであったが、尾崎が訪問したときは、毎週2日間は用事のない人でも面会できると書かれた札がかけてあった。大統領に面会して、握手をするには添書きも必要なく、単に玄関で面会を申し込めば、直ちに可能となるのである。さすがにアメリカはリンカーンを輩出した国だと感心した〔註46〕。尾崎にとってリンカーン大統領は、特別だったようである。

5. アメリカ女性に対する観察

アメリカでの女性の社会的地位が高いのにも感心したが、そのことを通して当時のアメリカ社会の一面を指摘した。アメリカの婦人は、「自治独立の氣象に富む」ことは欧州諸

国の人々も「驚くほど」だが、先般の女性の権利を拡張する会議に際しても、「堂々たる大議論」があった。そのとき尾崎が不思議に思ったことは、女性の権利を拡張することを主張する婦人が「大抵顔色美麗なる方々には非らずして寧ろ醜悪なる方々」であったことである。これは「顔色美麗」であれば「天下の男子は恰も皆な其奴隷なるに均しく其一顰一笑は以て男子を殺活せしむるに足り、其意の向ふ所男子唯だ之を推察して之に従順する能はざらんことを恐るゝの勢にて、舞踏の宴、看花の会、日夜の招請、訪問に忙はしくして復た他事を顧みるに遑あらざるものと見え、麗容天成の婦人は概ね其所に安んじ、強て政権を要求するが如きこと」がないのに対して、「顔色醜悪なる婦人」は頼みとする所が少ないために、自然と学業に打ち込んだ結果、その智識は男子を凌駕するほどになれば政治的権利が同じでないことを感じ、そのことが自分によく当てはまることに気づく。したがって、「男女同権の大義を武器として男子を攻撃する」ことになるのではないか。尾崎自身は、男女同権論者の総てが総てそうだという訳ではないが、「斯る方々も亦少なからざるべしと信ずるのみ。論より証拠女権論者中に醜悪多くして美人少なきを見よ」[註47]とまで述べた。

つづけて、アメリカでは「万事金の世の中にて、金銭以外更に貴き事物あることを知らざる米人なれば、容顔美なりと雖も其家貧しければ一生上流社会の人と交際する能はず、固より良縁を上流社会の男子と結ぶの機会なし」。また、生計の程度が高いことから「下等社会の人民」は毎日の生活に追われてしまうため、容易に細君を迎えることができず、もし「迂闊に」細君を迎えて子供でも生まれると「一家挙つて餓死するの外なし」とまで指摘した。それゆえ、女性は他人に嫁ぐことはなかなか困難なために、年頃になると結婚を求めることが甚だしく「其男子の眷愛を求むるの情は幾ど日本の芸妓に異ならず、唯だ言語挙動優美にして品格を失は」ないが、「決して徳操を乱さざるの相違」があるだけである。

そして、アメリカ社会では、「父兄は其嬢妹の徳操を傷らざることを信じ嬢妹は父兄の信用に背かざるが故に」男女の交際は「自由自在」であるとした上で、尾崎の目から見たアメリカ女性の厳しい現実を次のように述べた [註48]。

男女相ひ見るの道は立派に開け居れど、何分拜金国の事なれば男子は貧家の女を好まず、女子も亦成るべく富豪の子弟に嫁せんと欲するが故、望み通りの配偶を得ること甚だ難く、之が為め人に嫁せずして一生を送過する者甚だ多し。(後略)

ワシントンやニューヨークでも、老婦と未亡人が多いことを目撃したと尾崎は指摘しているが、このようなことが当時のアメリカ女性の現実をどこまで正確に捉えているかは判断しがたい。しかしながら、アメリカ女性の社会的行動や意識を直接日本女性が「模倣」することについて、尾崎なりの心配をしている点は実に興味深くある。アメリカは、まさ

に「金箔の時代（ギルデッド・エイジ）」を経験している時であるため、余計女性をこのように判断しても不自然ではなかったのであろうか〔註49〕。

6. アメリカ人の「金」と「貧相」について

こうして尾崎は、「ジャーナリスト」としての感性でいろいろなことを分析したのである。

こうした貪欲なまでの感性は、ニューヨークとワシントンとの比較にも及ぶ。尾崎によると、ワシントンはニューヨークと比較すると、「人間の極楽界」であるように見えるが、これはワシントンでは十字路の街頭を往来する馬車は大抵日本にある「勅任馬車」であり、市区は「美麗」である上に、閑静であり、通行する男女も何となく「閑雅悠長」であるためである。これに対してニューヨークは、「物質輻輳の商売地」であるため、四方に設けてある屋上汽車と石路の上を疾駆する荷車の響きで、室内にいる時でさえ談話を妨げられるほどにうるさく、また市街に出ると「喧々囂々」としていたため話声が耳に入らないほどである。こうしたいろいろな種類の「響音」が混ざっている有様は「恰も風雨大に至るが如く、又大海怒濤を捲くに似たり、斯る所に長居せば必ず耳を悪くすべしと思はるど、実際は左までにあらずにや」〔註50〕と感じたのである。

「官吏の俸給」についても報告しているが、そのなかで日本の官吏の俸給がアメリカと比べて「不釣合に多きこと明白」であり、民間の職業と比較すると益々「過多」であることが分かるとした〔註51〕。

このほかにも、たとえば少数者の「器械」となって「人民多数の利益に反対する」「専制国の兵隊」と比較して、アメリカの兵隊は常に「国民福利」のためにその「生命を抛つものと定ま」っているため世間の人々は彼らを「愛敬」しており、また兵隊自身も「国家の功臣たり忠臣たることを自信して常に人に誇るの風あり」ということを書いた。そして、その批評の最後のところでは、黒人の奴隷が軍服や巡査の制服を着用すると、「形觀の勇壯」が「立派」であるため驚いたという報告もしている〔註52〕。

以上述べてきたアメリカ報告を日米関係のなかでさらに整理し、今後の展望を提示した。このなかでまず、今後日本が採用すべき政策を、「今後益々親密の交際を結ぶ」ことこそ日本の官民の「主義」とすべきであると指摘する。アメリカは「政略上商業上無双の好隣国」であるとしてこれまでの議論と一致した指摘をした上で、「日本鼯鼠の人」を増やそうとして「多少の精神を勞」すると述べ〔註53〕、冷静にアメリカ人の考えを纏めようとしている。日本人の滞留者にもかかわらず、アメリカ人の中では日本人の評判は良い方で、「日本鼯鼠の人物は至る所に」おり、「日本狂とも称すべきほど日本好きなる人も少なからず」と書くが、これはニューヨークや主な都会にも日本商品を売買する内外人の商店が多いからであるとする。しかし、こうした日本がアメリカで評判が良い最大の原因は、日本が「早く進歩開明の途に上り、泰西の自由制度を誘入せること」〔註54〕を原因

としていると指摘する。

また、「自由の大義に反対するの形述を實行上に現出する如き」ことがないようにしなければならない。日本において言論集会や「欧米人の最も貴重する自由を抑制すること数々なれば、切角評判宜しき日本も次第に悪評を得て愈々其身方を減少」することになると述べ、アメリカ人は日本人に「保守主義」で日本の古墳を「保存」するよう話もし、その一方では政治上の問題については「改進黨」を執って「人類天賦の自由と権利を抑圧する」ことがないことを求める。そして、日本が政略上通商上の「便益を増加する」のであれば、「真誠の政治家は決して之を度外視」してはならないとする〔註55〕。

つづけて日本に欧米諸国人が「皆な認めて不可」とするような事態が「現出」した場合には、外国帰りの者が「如何に口舌を以て日本の政法の完備」していると説明しても、外国人は「決して之を承知」するものではなく、特に尾崎が今回の洋行の原因となった保安条例の実施は、「山河万里を隔てた」米国人にも「余ほどの感触を与へしものと見え、有名なる諸新聞は筆鋒を揃へて此事を論弁し、何れの交際社会に至るも日本人さへ見れば貴女紳士群れ来て其詳況を聞かざるはなかりし」という状況である。それゆえ尾崎は、東京を追われた者たちは「火付、盜賊の振舞を企てたるが為めに聊か懲罰せられたるまでの事」と弁解したが、いずれにせよこのことで日本が「国位を引下げた」と述べ、現在では「大した結果」ではないが、このようなことも「積もれば以て大に日本蠱虜」の人たちを減少させることになり、このことが欧米人をして日本の「政法の完美にして無理なきことを認承せしむるに非ざれば、到底法権、税権を回復して対等の交際を為す能はず」と指摘した〔註56〕。

次にアメリカは日本と「対等の新条約」を締結することも「厭はざる国柄」であるため、この一点から見てもそのアメリカの好意を増やして、日米関係を「親密にするの必要なること多辞を待た」ないが、にもかかわらず日本政府は、その「返礼」をしないどころか「底意の知れざる日耳曼〔ゲルマン〕と親んで米國を疎んずるは不可なるに似たり」と指摘するとともに、先の条約改正案のなかでイギリス産の木綿金巾糸の上にアメリカ産の石油の税額を置いたことに対して、アメリカの上流の有力な人は、「苦情を鳴ら」している。つまり、これまでアメリカは日本に対して「特別の好意」を示してきたのに、日本は欧州諸国に「厚くして我に薄からんとは」と言うのである。したがって、この点についても日本は「一層深く注意せられんことを望む」と言うのである〔註57〕。

以上のいずれもが、当時の日米関係に関する指摘であった。

イギリスに向けてニューヨークを出航する直前、尾崎は、文明と金との関係についての社説を書いて送った。これは、この時のアメリカ体験を締めくくる形で日本の社会的価値にまで言及した内容となっている。まず「文明の程度進歩する毎に金銭の勢力は愈々増加する乎」という設問を立てて、それに疑問を呈する形で議論を始め、ある程度までは「文明の進歩と共に愈々金銭の勢力」が増加するが、文明が「益々進歩」するとそうではな

くなってくる。アメリカの文明は、「皮相家」が見ると「金銭を基礎」としているように見え、「気韻甚だ卑低にして俗気上下四方に充満」しているにも拘わらず、なお「土崩瓦解の患を生じ」していないのは、「金銭以外に独立する学芸宗教の勢力頗る強大にして、常に新鮮なる清気を放て銅臭紛々たる悪気を掃蕩」するからであると指摘する。そして、「極論すれば金銭は決して社会の基礎と為り得べき者に非ず」と断定した〔註58〕のち、アメリカの文明に関してさらに進んで自らの考えを次のように述べ、このことを日本が安易に輸入することに警告を發した〔註59〕。

然るに米人の金銭を崇拜するは、動物的の念慮に富み動物的の文明に安んじ、未だ高尚優美なる思想もなく、智識もなく、又形以上の快樂を知ること甚だ少なきが為めなることを知らず、却て之を善事と想ひて日本に輸入せんとするは軽率の至りと云ふべし。

こうは述べつつも、その一方では「上流達見の士」は、物質文明は文明の中で「劣等」であることを「熟知」し、何とかしてアメリカの「思想と気韻とを高尚にし、以て形以上の文明を進歩」させようとして美術を「奨励」したり哲学を「勸諭」したり、あるいは金銭だけを目的として働くことの「卑劣」さを「大声疾呼」したりする。また甚だしいのは、アメリカを「亡ぼす者は物質主義なり、金銭崇拜宗」とまで「痛論」する者もいるほどであるが、こうした事実を知らずに、文明の目的は「物質上の進歩」であって「金銭を崇拜せざるは野蛮人の本色」であると「誤解」して、「高尚優美なる日本固有の思想を滅却して下品卑劣なる拝金宗徒と為さんと欲するが如き心得違ひの人あるは嘆かばしき事の限りなり」〔註60〕と書いた。

つづけて尾崎は、日本人は古来より「高尚なる教育」をうけて「金銭を軽んずるの風」があるため、「皆な清廉」で欧米人のように「卑劣なる言行を為す」者が少ないが、これは欧米の識者全員が「健羨する所にして其日本人を見ると大に支那人に異なる所以の一大原因」であるとまで論じた。そして、日本人は「商買には疎けれど學問には敏捷」であり、「風流都雅の意欲に富んで其情韻の高尚なること欧米人の企及する所にあらず」とまで断じるが、アメリカも識者は「風流都雅の意欲を養成せん」として「尽力」しており、これに「官民共に勞費を吝まずして之を奨励する」ことになれば、「数十年後は必ず多少之を生ずるに至るべし」とした。こうした問題に対するアメリカ人の態度を通して、将来の日本の姿勢に言及し、「故に新聞、講談、学校等を以て人民を教育するの任に当るものは、流行後れに金銭を崇拜するが如き卑劣なる邪宗を誘入することなく、其目的を学芸、道德、美術等の点に定めて専ら之を奨励するを善し」と述べたのである〔註61〕。

この文章は『朝野新聞』の社説であったが、ここでも基本的にはアメリカをモデルとして日本のあるべき姿を一貫して論じているのである。いずれにせよ、将来のアメリカ人の

姿勢にも期待していることは明らかである。

おわりに

ニューヨーク滞在中に公使に赴任する陸奥宗光と面会の予定であったが、陸奥が直接ワシントンに向かったことから果たせなかった。そして、同年6月24日に大隈重信に「当地の見聞は尚甚た不十分に候得共、何分暑気の強きに困却致候間、来る廿七日発の汽船にて渡英可仕候。」[註62]と報告して、イギリスに向う準備をしたのである。

1888年2月17日にサンフランシスコに入港して以来、尾崎のアメリカ探訪は、精力的な活動と観察に基づく縦横無尽とも言える筆致でアメリカを分析・報告することに結実した。かくして、短期間のアメリカ滞在ではあったが、充実したものとなった。こののちのイギリスでの記事と違って政治社会に関する内容が圧倒的に多くなったのは、おそらく尾崎は既に日本にいる時からイギリスの政治社会に関する書籍を翻訳したり、またそれに基づいて日本の政治社会を批評する記事を随分と執筆していたため、アメリカの方が目新しく感じたからかもしれない。それゆえ、正にこの時の尾崎にとってアメリカ、とくにその文化は、見るもの聞くものの総てが新鮮であるとともに、報道意欲を掻き立てられたものと思われる。

さて、尾崎は、ニューヨークが急に熱くなったので、弟の行旅を残していよいよ最も憧れ続けた国であるイギリスに向けて、同年6月27日にリバプールに向けて出発したのである。

註

- 1) 尾崎行雄に関する記事や研究は数多くあるが、ここではこのテーマに関連したものしか挙げない。中でも、特筆すべきは、既に『尾崎罌堂全集』全12巻(尾崎罌堂全集刊行会、1960年)が刊行されていることである。尾崎が執筆した著書と新聞記事などを中心に収録されており、大変便利である。また、研究も数多く出されており、尾崎に対する関心の高さを示すものであるが、ここでの筆者の関心はこの1888(明治21)年の欧米旅行期に限定して論じているため、その関係の文献しか取り上げないことを断っておきたい。このときの尾崎の遊学に関する研究ノートとして、中原信雄「尾崎行雄におけるナショナリズム—明治21～23年『欧米漫遊記』を中心に—」(歴史学研究会編集『歴史学研究』1962年6月、45-52、44頁)がある。また、尾崎の弟子の伊佐秀雄は、最も包括的な尾崎の伝記(『尾崎行雄伝』尾崎行雄伝刊行会、1951年)を刊行しており、その中でこの時の旅行を取り上げている(341-408頁)。
- 2) 鎌田栄吉、尾崎行雄「犬養・波多野・伊藤君の追憶」(『木堂雑誌』第10巻9号)10頁の尾崎の証言である。尾崎は、「その人〔犬養〕がやはり慶応義塾の生徒であるといふことを承つた。向ふに行つた時には生徒であつたかどうか知りませぬが、聽て慶応義塾に犬養ありと云ふ評判で大変であつた。西南戦争にはえらい評判でありました。私はどういふ訳か会ひもせず、交際もしない裡に田舎へ行つた」(同上、同頁)と述べている。
- 3) 『罌堂自伝—日本憲政史を語る—』(尾崎罌堂全集編纂委員会〔代表者・鈴木正吾〕編『尾崎罌堂全集』第11巻所収、同全集刊行会、1960年、163頁。なお、『尾崎罌堂全集』は以降『全集』と略記し、『罌堂自伝』は以降『自伝』と略記)。尾崎が保安条例前後のことは、尾崎行雄「退去日録」(『全集』第3巻所収)301-22頁に詳しい。また、西洋に行くことを勧めたのは大隈重信だということを聞いている

ということを伊藤痴遊は述べているが、真相は尾崎しか分からないとも証言している（「痴遊曰」、鷺尾温軒〔義直〕「罌堂先生の手紙」『痴遊雑誌』1936年8月号、48頁）。

- 4) 大西理平編『朝吹英二伝』（同伝記編集会、1928年）146頁。
- 5) 前掲、「痴遊曰」48頁。
- 6) 犬養毅宛尾崎行雄書簡、1888（明治21）年1月7日付、同上、46頁。
- 7) 犬養当弘宛犬養毅書簡、1888年4月4日付（鷺尾義直編『犬養木堂書簡集（復刻版）』岡山県郷土文化財団、1992年）24頁。
- 8) 田口卯吉との論争については、時任英人『明治期の犬養毅』（芙蓉書房、1992年）40-45頁を参照。
- 9) なおテオドラ夫人に就いては、原不二子「欧米の文献に見る罌堂－尾崎行雄の外国における評論・紹介・エピソード」（相馬雪香・富田信男・青木一郎編著『罌堂 尾崎行雄』慶應義塾大学出版会株式会社、2000年）214-20頁参照。
- 10) 『自伝』174頁。
- 11) 『自伝』175頁。
- 12) 伊佐秀雄、前掲書『尾崎行雄伝』351頁。
- 13) 『自伝』177頁。
- 14) 伊佐秀雄、前掲書、342頁。
- 15) これからの記述は、尾崎行雄『欧米漫遊記』（『全集』第3巻に所収）と『自伝』に基づいている。以降、記載の根拠を示さない記事はタイトルのみ記載しているが、総て『欧米漫遊記』から引用している。
- 16) 「航路所見（前記）」326頁。
- 17) 「遭難記事」333頁。
- 18) なお、尾崎の主な党歴については、富田信男「尾崎行雄 党歴」、前掲書『罌堂 尾崎行雄』105-108頁に所収されているに詳しいので、そちらを参照。
- 19) 尾崎の中国論については、現在では最も優れていると思われる、加地直紀「尾崎行雄のシナ征伐論」（『平成法政研究』第19巻第1号）99-126頁を参照。
- 20) 大隈重信宛尾崎行雄書簡、1888〔明治21〕年2月19日付（早稲田大学大学資料センター編『大隈重信関係文書』第3巻、みすず書房、2006年）143-44頁。
- 21) 「米国雑観 新聞紙の事（桑港に於て）」341頁。
- 22) 『自伝』181-82頁。
- 23) 「米国在留日本人」344-45頁。
- 24) 同上、347頁。
- 25) 同上、同頁。
- 26) 同上、347頁。
- 27) 同上、347-48頁。
- 28) 同上、349頁。
- 29) 同上、350頁。
- 30) 同上、350-51頁。
- 31) 同上、351-53頁。
- 32) 「途上雑感（自桑港至紐育）」360頁。
- 33) 同上、363頁。
- 34) 同上、363-64頁。
- 35) 「米国進歩の景況一斑」361、371-72頁。なお、アメリカのサクセス・ストーリーには「セルフメイド・マン」という考え方があがるが、この点については、有賀貞『アメリカ史概論』（東京大学出版会、1987年）18-19頁参照。
- 36) 同上、371-72頁。
- 37) 同上、372頁。
- 38) 「日米間の関係」376頁。

- 39) 同上, 377-78 頁.
- 40) 同上, 378 頁.
- 41) なおこの点については, 財団法人開国百年文化事業会編纂『日米文化交渉史』第2巻(通商産業編)(洋々社, 1956年)11頁, また大畑篤四郎「近代国家樹立の目標と日米関係 1868-1895」(細谷千博編『日米関係通史』東京大学出版会, 1995年)48頁をそれぞれ参照.
- 42) 「華盛東府-市区の齊整」382頁. これにつづいて, 大審院長の指名をめぐる政治過程を見聞したことを報告している(「共和民主両党の争闘」383-85頁).
- 43) 「国会の傍聴」386-87頁.
- 44) 同上, 387頁.
- 45) 「紐育府-諸官衙の模様」389-90頁. 議会を傍聴したのち, 日本で政治小説を書いていた, 尾崎の同僚であった末広鉄腸(代表作『雪中花』や『花間鶯』がある)が同年4月13日に外遊のため横浜から出発したと聞いたので, 必ずワシントンを訪れると考えて待っていたが, 連絡がないため恐らく尾崎と同じように検疫に引っかかっているものと考えて, 尾崎はワシントンからフィラデルフィアに立ち寄ったのちにニューヨークに戻ろうと決心して旅支度をしていた. その時5月14日, 突然末広から昨日ニューヨークに到着したと報告する電報が届いた. しかも, 16日には欧州に出発するというので, 尾崎は暫くアメリカに留まらせようと考えて, 15日にニューヨークに戻ったが, 既に末広は, イギリス行きの切符を購入しており, 他の便との交換はできないとのこと, ついに16日に出発した. 尾崎にしてみると, 末広にアメリカ見物をさせられなかったことは「残念」であったが, 同じ『朝野新聞』に尾崎と末広が別々に取材して「異種の事物を見聞して異種の報道を為す方却て都合宜しかるべし」ということで納得したようである. 尾崎は末広がニューヨークを出発したのち, 次のように報告している. 「今頃は鉄腸兄は既に倫敦府に到着し油断なく諸般の事柄を取調べ居る事と存ず, 同氏は元來容易ならざる持病〔糖尿病のこと〕を扣て身の上ゆゑ海山万里の行程は必ず健康に障はるべしと密に心配せしに, 過日面会せし時の様子にては毫も疲衰の状なく至極強健なりし. 尤も北米大陸の汽車中にては多少の失策もあり, 之が為め随分困難に遭遇し聊か健康をも害した由なれど僅に一時の事にて当時は強健なること在京の日に異ならざるべし, 社友を始め辱知の諸君幸に御休神あれ.」(同上, 388頁).
- 46) 「紐育府-諸官衙の模様」390頁, また『自伝』185頁.
- 47) 「米国婦人の景況」395頁.
- 48) 同上, 398頁.
- 49) 19世紀末40年間の結婚率は最も低く, 適齢期の女性の10%以上が結婚せず, 彼女たちは高い割合で大学卒業生と専門職であり, この期間離婚率も高くなったということであるから尾崎の指摘はこの点を指しているのであろう(有賀貞・志邨晃佑・平野孝「産業発展社会期のアメリカ」『世界歴史大系 アメリカ史2-1877年~1992年-』山川出版社, 1993年, 41頁). なお, 「金箔の時代」については, 有賀貞, 前掲書, 226-31頁参照.
- 50) 「雑事」400頁.
- 51) 「米国通信(華盛東府に於て)-官吏の俸給」418頁.
- 52) 「修墓日の景況」427-28頁.
- 53) 「米人の日本に対する思想感情」435頁.
- 54) 同上, 437頁.
- 55) 同上, 438頁.
- 56) 同上, 439頁.
- 57) 同上, 440頁.
- 58) 「文明と金銭との関係(朝野新聞社説)」447-49頁.
- 59) 同上, 450頁.
- 60) 同上, 451頁.
- 61) 同上, 457-58頁.
- 62) 大隈重信宛尾崎行雄書簡, 1888年6月24日付, 前掲書『大隈重信関係文書』第3巻, 144頁.

Yukio Ozaki's visit to the Western countries from 1888 to 1889 (Meiji 21-22) (Part1) — Focusing on his days in America —

Hideto TOKITOH

*College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts,*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2017)

Yukio Ozaki was a politician, who worked actively during the three Japanese eras of Meiji(1868-1912), Taisho (1912-1926), and Showa (1926-1989), and attracted attention socially because he made the most of the media and had continuously been involved in the central themes of those days. He aimed at realizing constitutionalism and Asianism in Japan, and disarmament and pacifism from the middle of the Taisho era. Most of such ideas of Ozaki was formed in 10s of the Meiji era. When he faced the situation that he was exiled from Tokyo due to his comments and activities when he participated in Daidodanketsu Undo (political movement to unite different parties for the same objectives beyond minor differences), he traveled to America and England for his personal study in 1888 with the advice and assistance from his friends (Tsuyoshi Inukai who was said to be like a friend of Eiji Asabuki and Ozaki and others who belonged to the same political party) and Shigenobu Okuma, the leader of Rikkenkaishin Party.

In America where he paid his first visit, Ozaki witnessed the American political system and their national character, about which had written in Japan, and at the same time, through re-examining Japan, he studied the reality and the coming direction of the relation between Japan and the USA reflecting the significance of political modernization of Japan and the revision of the treaty, and wrote articles about these matters on “Asano Newspaper” in Japan. Among these topics, he verified various matters especially regarding the democracy and culture of America.

In this paper, I have overviewed Ozaki's political ideal and at the same time, great prejudices through examining his travel journal in America, which was posted in “Choya Newspaper” in Japan.